

「ことばの相談室」活動報告

白井 結^{a)} 林 耕司^{a)} 富井 浩子^{a)}

a 長野医療衛生専門学校 言語聴覚士学科

The actual condition of children with language developmental disorders using the language consultation room

Yui Shirai^{a)} koji Hayashi^{a)} Hiroko Tomii^{a)}

a Nagano Medical Hygiene College

I. はじめに

令和5年度、長野医療衛生専門学校附属「ことばの相談室」(以下、相談室と略す)の活動をまとめる。

II. 活動報告

相談室の活動は、週3回(月・火・水)の開設とし、1回(45分)2ケースの相談・訓練を2名のSTが分担し行った。令和5年4月から令和6年2月までの延べ相談件数は98件。新規相談者数は11名だった。新規相談者についてまとめる。

1) 新規相談者

新規相談者数は11名で、その内訳は男児7名、女児4名だった。

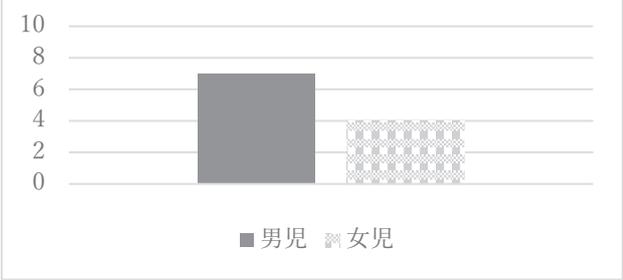


図1 性別内訳

2) 居住地

新規相談者11名の居住地は、千曲市4名、上田市4名、上田市外3名(長野市、東御市、小県郡長和町)。

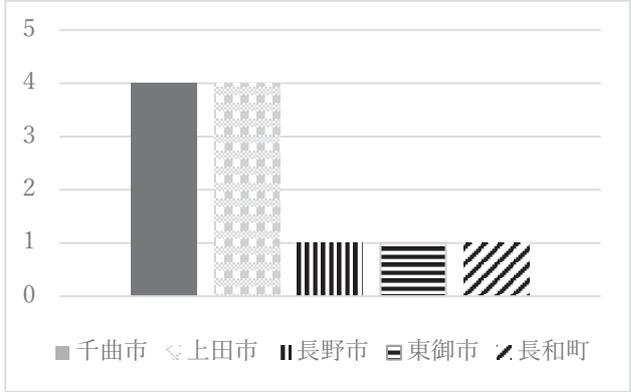


図2 居住地内訳

3) 診断名

知的障害(以下、IDと略す)2名、IDを伴う自閉スペクトラム症(以下、ASDと略す)1名、機能性構音障害3名、吃音2名、診断名無し2名、ASD、注意欠如・多動性障害(以下、ADHDと略す)、学習障害(以下、LDと略す)を伴う発達性

a 長野医療衛生専門学校
〒386-0012 長野県上田市中央2-13-27
info@nagano-iryousei.ac.jp

協調運動障害（以下、DCD と略す）であった。

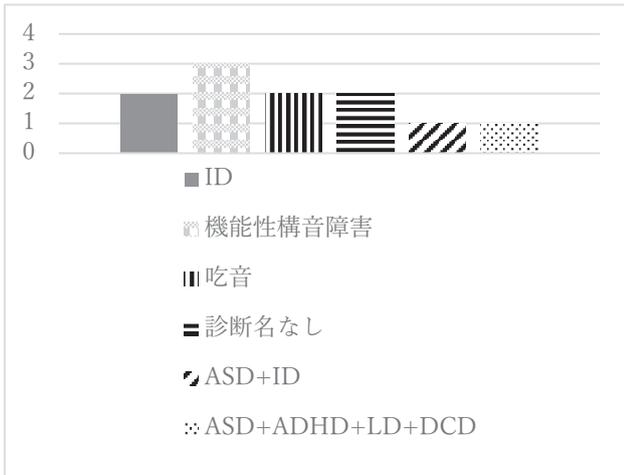


図3 診断名内訳

4) 年齢

年齢は13歳1名、11歳1名、8歳2名、6歳3名、5歳1名、3歳1名、2歳2名。

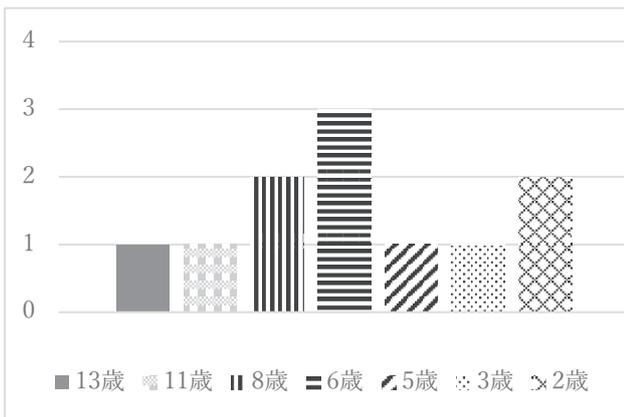


図4 年齢内訳

Ⅲ. 研究活動

相談室を訪れた症例に対し、相談室担当教員内で定期的に報告・相談を行っている。その中で、訓練成果を得ることができた症例については、2024年(令和6年)2月10日から11日に行われた「第10回日本小児診療多職種研究会」(東京)にて発表した。今大会のテーマは「多職種の無限∞力」であり、参加者は医師、言語聴覚士などの医療職、保育士、教諭などの教育関係者など多岐にわたった。

以下、発表について報告する。

発表テーマは「動画を用いた対面での小児構音訓練の試み～未獲得子音の産生が可能となった一例～」であった。

内容：言語聴覚療法における小児構音訓練は、対面で児がSTの口形に注目して行うことが原則であるので、マスク着用下では十分な訓練効果が得られない場合が多い。今回、STの口形動画を提示する訓練を実施し、未獲得であった歯茎破裂音の産生が可能となった症例を経験したので報告する。

【対象】CA5：2男児。ASDおよびID。＜S-S法＞にて2歳前半の発達年齢。発話は単語レベル、母音は構音可能。浮動的に産生可能な子音は/m/b/（後続母音が/aの場合のみ）。

【方法】事前に/mame/、/taiko/についてSTの口形を見せながらの従来式訓練を2回行った。その後STの/m/および/t/(共に後続母音/a)について、発話時の口形動画をタブレット端末で提示する訓練を6回実施した。訓練後、録音した本児の音声について、健聴被検者6名による受聴評価を行った。

【結果】受聴評価の結果、従来式訓練後音声を正答した被検者は0名であった。一方、動画訓練後音声では[ma]を[na]と回答した被検者が4名、[ta]を正答した被検者が3名であった。その後の訓練でも動画使用を継続した結果、[mi]、[mo]も産生可能となった。

【考察】動画には表情等の余分な情報を入れず、注目すべき対象を口形に絞ったことから、注視しやすくなったと考える。動画訓練は、マスクの有無に関わらず発達障害児には有効な手段であると考えられる。

会場内からの質問として「学生の受聴評価での異聴の要因についてどう考えているか」(回答：録音品質が良くなかったことが要因の一つと考えている。今後は受聴評価の方法の再検討、児の音声の録音環境の設定なども課題として考えている)

「本児の家庭に対し、構音課題を出しているか」
(回答：課題は出さず。本児と楽しくコミュニケーションをとる時間を確保してほしいと伝えている)「構音訓練と併せてコミュニケーション面への訓練は行っていたのか」(回答：構音訓練と併せてコミュニケーション面への訓練も行っていた。今後もどちらの訓練も継続していきたい)の3つが上がった。

IV. 今後の課題

相談室での相談・訓練は、保護者の承諾のもと、学生が見学している。令和5年度の学生見学の延べ数は、56名であった。

相談室開設当初からのねらいとして、①言語発達障害児とその保護者の相談及び支援で地域に貢献すること、②学生が臨床に触れることで勉学意欲を高めること③学生の臨床への高い意識を育てることをあげている。校内に併設されていることから、臨床現場を身近に感じてもらえる場として学生には積極的に参加してってもらいたいと考えている。しかし、現在の学生見学数は、相談のべ件数の98件に対し56名と多くの学生が参加しているとは言い難い。そこで今後、学生の参加をどう促していくかという観点から考えてみたい。まず、のべ見学数56名の学年内訳として1,2年生46名3,4年生10名と3,4年生の見学がとても少ないことが分かった。

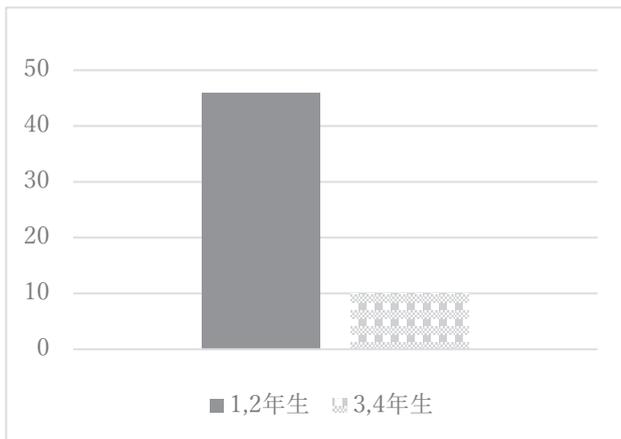


図5 学生見学内訳

これは、3,4年生になると国家試験に向けた授業や自習が多くなること、臨床実習の開始に向けた準備に忙しくなることが要因と考えられる。他の要因として、小児領域に対し苦手さを感じている学生や、言語発達障害に関して知識の乏しい学生は学年に関わらず見学を控える傾向にあると考えられる。

見学者数増加のための方法として一つ目に、学年に合わせた履修科目の中で相談室への見学を取り入れる制度的方法を考えていくこと。二つ目に、従来の見学中心の関りではなく、相談児・保護者と学生の交流を促すような取組みといった積極的に遊びに参加してもらうこと、という方法が考えられる。

いずれの方法を用いるにせよ、学生の主体的な学びに繋がる方法を模索していきたい。

V. まとめ

令和5年度の相談室での活動報告と今後の課題について報告した。令和6年度で相談室開室から5年が経過する。これからも、言語発達障害児とその保護者の相談及び支援で地域に貢献すること、学生の臨床への高い意識を育てることをねらいとし活動を継続していきたい。

本実践報告に申告すべき利益相反はない。

文献

[1] 白井結, 林耕司, 富井浩子 (長野医療衛生専門学校), 坂本真一 (オトデザイナーズ): 動画による構音訓練によって歯茎破裂音の産生が可能となった知的障害を伴う自閉症スペクトラム障害児の一例, 第23回日本言語聴覚学会抄録集, 1-6-101, 2022